美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

1

2024 January/February

TAKE FREE

NO.81

特集

詩人・吉野弘さんからの手紙

庄内憧憬

特別インタビュー

谷川俊太郎 詩人

Cradle 1

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2024 January/February

令和6年1月1日発行（偶月奇数月発行）第14巻3号（通巻81号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市京田2-59-3（コマツ・コーポレーション）電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／夜明けに羽ばたく白鳥

謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

荘内銀行

詩人、吉野弘さんのこと

谷川俊太郎・談

――『吉野弘全詩集』（1994年刊）に、谷川さんが帯文を寄せられていますが、こちらはどのような想いで書かれたのでしょうか。※左ページ写真

谷川　戦後の日本の現代詩というのは抽象的な言葉で語られることが多くて、詩にあまり縁がないような人たちには少し分かりにくいものになっていたところがあるんですよね。でも吉野さんの詩は違っていて、普通の生活を送る人間なら誰にでもじんとくるような言葉で書かれていてね。そこが僕はすごくいいなと思ったわけです。

なぜそういった詩が書けるのかというと、吉野さんは現実生活の中のリアリティみたいなものを見失わずにいたという感覚がありますね。詩を書く人ってどこか極端なところがあったりするんだけど、吉野さんはごく普通の庶民としての感性を持ち続けていた。抽象的な思想とか信念とかは掲げていなくて、具体的な生活とその周囲から発想させた詩が多いですよね。抽象性の希薄さ、逆に言えば、現実生活の濃さ。そこから詩が生まれ出ることに、他の現代詩人や難解な現代詩とは違う感触を持っていました。それが僕にはとても新鮮だったし、だから人に伝わる詩になっているのだと思うんです。

――帯の文末には「すべての同時代人に吉野さんの詩を読んでもらいたい。そう思う私の気持ちの中には怒りに似たものがある」とありますが〝怒りに似たもの〟とは、何だったのでしょう。

谷川　「怒り」という言葉の中身は複雑で、いわゆる流行りの現代詩とは違う色合いが彼の詩にはあって、それを読者がどこまでちゃんとつかまえられるか僕は疑問だと思ってたんですよね。

――その読み手への懐疑的な思いは、そのまま吉野さんの詩に対する谷川さんの評価ともいえますね。

谷川　吉野さんの書かれたものに対する自分の態度というのは、初めて吉野さんの詩を読んでから晩年に至るまで、基本的に変わってないんですよ。彼の詩の良さをどういうところで認めてるかっていうとこはね。

――それでは谷川さんにとって、吉野さんの詩、また詩人像とはどういうものですか。印象的な詩もあればお聞かせください。

谷川　最初に印象に残った詩は「I was born」でしたね。ただ、詩の一篇一篇より、吉野さんが生きて書いてきた全体が僕の中には残っていて、それを一言で言い表すのは難しいんです。

僕には、自分の心の中に残ってる詩人が何人かいて、吉野さんがその一人であることは確かです。詩を読んでも詩人像とピントが合っていない人もいっぱいいるわけだけど、吉野さんは詩人としてだけじゃなく一個の人間としての良さを一貫して持っていたと僕は考えてるわけね。例えばすごくいい詩も、人間性が詩に生きていないと僕の場合はなかなか評価できない。その点、吉野さんは人間も詩もひっくるめて信頼できた人でしたから。本当にやさしさがある人だったしね。人間としての詩人、吉野さんはその一人です。

僕は東京生まれの東京育ちで、ローカルの良さや
土地の個性みたいなものを感じずに育ってきたんです。
だから、吉野さんのように他の土地に生まれて詩を書いた人は、
東京の詩人とは違うリアリティがあるんですけど、
僕には分析することができないんですね。でも酒田は、吉野さんがいたおかげで
土地のローカリティみたいなものが印象に残っています。

撮影・深堀瑞穂

『吉野弘全詩集』（青土社、1994）

たにかわ・しゅんたろう／詩人。1931年、東京生まれ。10代の時に詩集『二十億光年の孤独』（創元社、1952）でデビューして以来、詩、絵本、脚本、コミック『PEANUTS』全作品の翻訳などさまざまなジャンルで作品を発表。吉野弘さんとは詩誌「櫂」の同人として、1950年代から一時代を共に過ごす。90歳を過ぎた今も新聞や文芸誌等に新作を発表し続けている。近著に、ブレイディみかことの共著『その世とこの世』（岩波書店、2023）。

特集

詩人・吉野弘さんからの手紙

みんな
なにかに招かれています
草は高さに
道は遠さに
空は深さに
人は死と愛に

親愛なる、小言幸兵衛殿
世の救い難さを案ずるより
杏の里にお出掛けあれ。
「杏の里から」

「他を非難して周囲が見えなくなっている人間が
私の舌の好みには一番でね
おいしいことこの上なし、さ！」
「好餌」

海
どこを目差している？
すべての川は海を目差して集まるのに
「海に」

他人を励ますことはできても
自分を励ますことは難しい
「自分自身に」

健康で　風に吹かれながら
生きていることのなつかしさに
ふと　胸が熱くなる
そんな日があってもいい
そして
なぜ胸が熱くなるのか
黙っていても
二人にはわかるのであってほしい
「祝婚歌」

お父さんが
お前にあげたいものは
健康と
自分を愛する心だ。
「奈々子に」

やさしい心の持主は
いつでもどこでも
われにもあらず受難者となる。
「夕焼け」

——諸君
魂のはなしをしましょう
魂のはなしを！
なんという長い間
ぼくらは　魂のはなしをしなかったんだろう——
「burst——花ひらく」

樹木は思う。
人のくらしは
樹木のくらしにそっくりだと。
「樹木は」

人間の歴史にも
同時代の味覚に合わない種子があって
明日をひっそり担っていることが多い。
「種子について——『時』の海を泳ぐ稚魚のようにすらりとした柿の種」

人さまざまの
願いを
何度でも
聞き届けて下さる
地蔵の傍に
今年も
種子をこぼそう
「草」

雪国のひとの目をのぞいてごらん
ありありと天の目が飛びかっている
「雪国抒情」

樹木の根のように
闇を抱く営みが人間にもある
樹木の梢のように
光を求める営みが人間にもある
「顔」

生命は
自分自身だけでは完結できないように
つくられているらしい
「生命は」

母は
舟の一族だろうか。
こころもち傾いているのは
どんな荷物を
積みすぎているせいか。
「漢字喜遊曲」

緑の葉は光合成をいとなむ
私の言葉は何を？

——おーい、君の家が虹の中にあるぞォ
乗客たちは頬を火照らせ
野面に立った虹の足に見とれた。
多分、あれはバスの中の僕らには見えて
村の人々には見えないのだ。
そんなこともあるのだろう
他人には見えて
自分には見えない幸福の中で
格別驚きもせず
幸福に生きていることが——。
「虹の足」

銅版画 梅原万奈

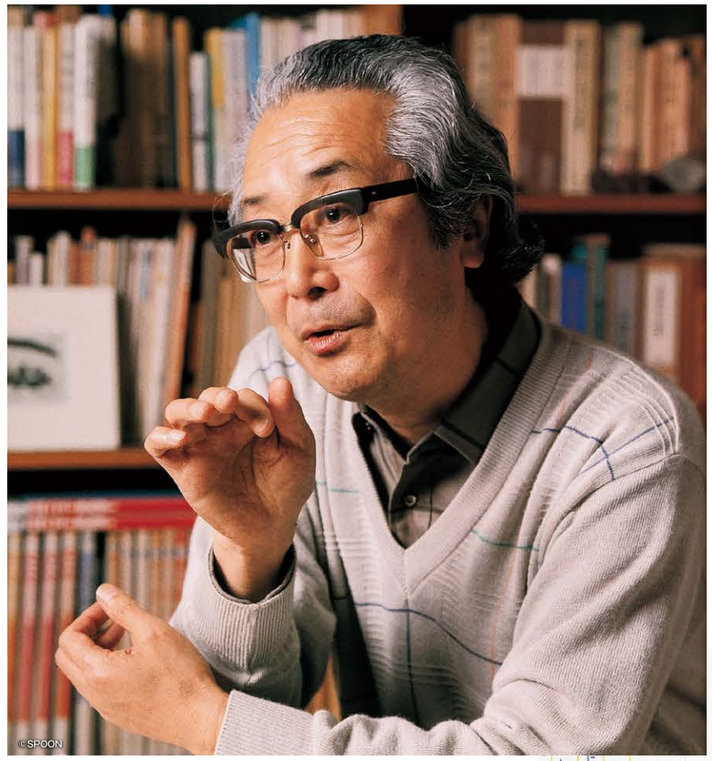
《参考資料》
『おしゃべりポエム 風の記憶』（SPOONの本、1998）
『花神ブックス2 増補 吉野弘』（花神社、1998）
万里小路譲著『吉野弘 その転回視座の詩学——吉野弘詩集論』（書肆犀、2009）
吉野弘著『現代詩入門（新版）』（青土社、2014）
吉野弘著『吉野弘全詩集（増補新版）』（青土社、2014）
『ユリイカ 総特集 吉野弘の世界』（青土社、2014）
館報 光丘『吉野弘さんの詩をめぐる対話 第1～7回』（光丘文庫、2014～2018）

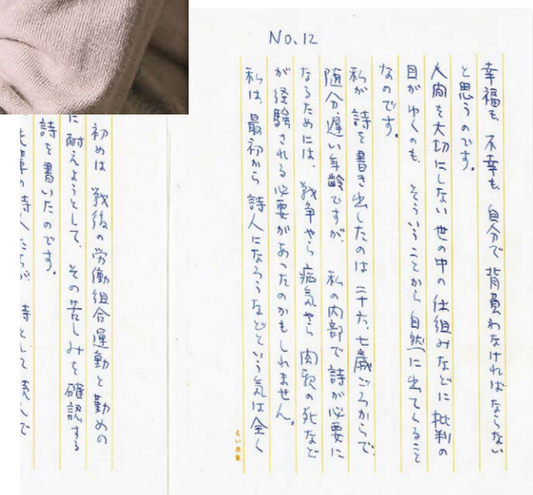
特集
詩人・吉野弘さんからの手紙

1926年・大正15年／昭和元年
1月16日、飽海郡酒田町に、父・末太郎、母・貞の子として生まれる
1932年・昭和7年／6歳
酒田市琢成第二尋常小学校に入学
1938年・昭和13年／12歳
小学校を経代で卒業
酒田商業学校に進学
母・貞が病没
1942年・昭和17年／16歳
戦時中のため繰り上げ卒業
1943年・昭和18年／17歳
帝国石油㈱入社、山形鉱業所（酒田）に勤務
1945年・昭和20年／19歳
山形歩兵第32連隊に入営前の8月15日に敗戦を迎える
1949年・昭和24年／23歳
労働組合の専従職員として首切り反対ストに奔走
過労のため肺結核を発病する
1950年・昭和25年／24歳
東京の病院で胸郭成形手術を受け、右肋骨6本を切除
入院中、詩人の富岡啓二と知り合う
1951年・昭和26年／25歳
8月、退院。10月、復職
1952年・昭和27年／26歳
『詩学（6月号）』に「I was born」が掲載
11月号に「I was born」が「川」、
飯野喜美子と結婚
1953年・昭和28年／27歳
『詩学（2月号）』で詩人に推薦
詩誌「櫂」に参加（3号～）
酒田病院のサークル詩誌「谺詩の会」に参加
1954年・昭和29年／28歳
7月7日、長女、奈々子誕生
1957年・昭和32年／31歳
第1詩集『消息』（谺詩の会）
新潟県柏崎市に転居
1958年・昭和33年／32歳
石油資源開発㈱に移籍
東京都板橋区に転居
1959年・昭和34年／33歳
第2詩集『幻・方法』（飯塚書店）
1962年・昭和37年／36歳
3月、次女、万奈誕生
コピーライターに転職
1964年・昭和39年／38歳
第3詩集『10ワットの太陽』（思潮社）
1967年・昭和42年／41歳
合唱組曲『心の四季』（高田三郎作曲）を作詞
1971年・昭和46年／45歳
第4詩集『感傷旅行』（葡萄社）
1972年・昭和47年／46歳
『感傷旅行』で読売文学賞受賞
埼玉県狭山市に転居
1976年・昭和51年／50歳
母校、酒田市立琢成小学校の校歌を作詞
1977年・昭和52年／51歳
第5詩集『北入曾』（青土社）
第6詩集『風が吹くと』（サンリオ）
1979年・昭和54年／53歳
第7詩集『叙景』（青土社）
1983年・昭和58年／57歳
第8詩集『陽を浴びて』（花神社）
酒田市制50周年記念 合唱組曲
『風光歌』（服部公一作曲）を作詞
1985年・昭和60年／59歳
第9詩集『北象』（アトリエ穂）
1989年・平成元年／63歳
第10詩集『自然法滞』（花神社）
1990年・平成2年／64歳
『自然法滞』で詩歌文学館賞を受賞
1991年・平成3年／65歳
「べにばな国体」（1992年開催）の国体賛歌、炬火賛歌を作詞
1992年・平成4年／66歳
第11詩集『夢焼け』（花神社）
1996年・平成8年／70歳
酒田市特別功労賞
1998年・平成10年／72歳
埼玉文化賞（芸術部門）を受賞
2007年・平成19年／81歳
静岡県富士市に転居
2014年・平成26年／87歳
1月15日、肺炎のため逝去

吉野弘さんと酒田

今から45年ほど前、吉野弘さんが酒田市の高校生に返信した一通の手紙があります。「吉野さんの青春時代はどのようなものでしたか」高校生のその問いに答えた10数枚の便せんには、詩人の原点ともいえる故郷酒田での若き日が綴られていました。


©SPOON


No.12
幸福も、不幸も、自分で背負わなければならないと思うのです。
人間を大切にしない世の中の仕組みなどに批判の目がゆくのも、そういうことから自然に生てくることなのです。
私が詩を書き出したのは二十九、七歳ごろからです。
随分遅い年齢ですが、私の内部で詩が必要になるためには、戦争や、病気や、肉親の死などが経験される必要があったのかもしれません。
私は、最初から詩人になろうなどという気は全く
初めは戦後の労働組合運動と動めの
に耐えようとして、その苦しみを確認する
詩を書いたのです。
吉野の詩人たちが、詩として表した

「お心のこもったお手紙、有難うございました。とても嬉しく読ませていただいたのです」。吉野さんが同郷の高校生に宛てた手紙は、やさしく語りかけるように、詩を書き始めた青年期のことを綴っています。

大正15年、吉野弘さんは酒田の今町（現北今町）に生まれました。少年時代はわんぱくで、しかしどんな悪さをしても母の貞はけっして怒らず言葉で諭したといいます。自分と向き合ってくれたお母さんを、酒田商業学校に入学したばかりで亡くし、その後、繰り上げ卒業となって国策会社に入社。兵役に就く目前で敗戦を迎えます。軍国少年だった吉野さんにとって、正しいと信じていたものをすべて否定された敗戦の経験は、吉野さんが生き方を変える転機となりました。自分の行動は他から与えられるものではなく、自分で考え、判断し、人生に責任を持つのだと。

戦後は労働組合の運動に奔走し、その疲労がたたって肺結核を発症。しかし、奇跡的に快癒します。戦争や病で肉親や友人を失いながら、自らは死を免れ、生きている。吉野さんは「生命を大切にしないわけにはいかない」という強い意志で、詩人としての一歩を踏み出しました。

昭和27年、以前から書き始めていた詩を、詩誌『詩学』に投稿すると、2作目の「I was born」が評価され、本格的に詩作の道へ。そして昭和32年5月、念願の第一詩集『消息』を刊行します。収録詩の多くには、商品として扱われる労働者の苦しみ、社会への怒りが。「自分の置かれている状態を、自分にはっきりと通知することで、その状態に耐えるというのが、私の詩へのスタートだったと言えそうです」。手紙のその言葉からは、後年のおだやかな詩人像とは違う、若き吉野さんの姿が見えます。

その後、31歳で酒田を離れ、87歳の時に静岡県富士市で生涯を閉じるまで、日々の喜怒哀楽や人生の春夏秋冬を、わかりやすく、あたたかく、ユーモラスに、時に鋭い言葉で書き続けた吉野さん。「僕は、冬の激しさ、厳しさにさんざん痛めつけられて育っていたから、穏やかさというもののありがたさを強烈に感じます」。★

厳しい冬に耐え、待ち遠しい春が来る。「冬の海」や「雪の日に」の心象にも、「生命は」に吹く風にも、「虹の足」の幸福論にも、その詩の心には酒田で過ごした時間が重なるようです。生きるとは、幸せとは、生命とは――。吉野さんの詩は手紙となって、今日も誰かの心に届けられています。

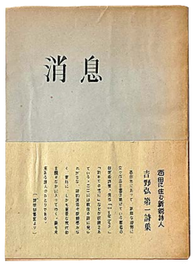
1

2

3

4

5



6

1. 1950年、酒田の日和山公園で。**2.** 1952年、帝国石油㈱の所属課対抗演芸会で吉野さんが脚本を担当、見事1位に。正面に写っている女性は後の吉野夫人、喜美子さん。**3.** 詩誌「櫂」の同人、茨木のり子や川崎洋、谷川俊太郎や大岡信らとは公私にわたる友人でもあった。**4**、**5.** 酒田の病院療養者らによるサークル「谺詩の会」、みちのく豆本『虹の足』（1973年、みちのく豆本の会）など、酒田の文芸界で活躍した佐藤十弥や大滝安吉らとの交流もあった。**6.** 第一詩集『消息』はガリ版刷の私家版。刊行時「櫂」のメンバーが合評会を行い、その録音テープを川崎洋が酒田の吉野さんのもとに届けたという。

★『おしゃべりポエム 風の記憶』（SPOONの本）より

特集
詩人・吉野弘さんからの手紙

詩の言葉、そのこころ

青年期、方言にコンプレックスを抱えていたその劣等感を逆手に取り、「日本語」で勝負しようと言葉を鍛えに鍛え、詩壇を歩いてきた吉野さん。吉野さんの詩の言葉と、そこはかとなく感じる庄内の風土性を詩をよみ、伝えてきた皆さんから語っていただきました。

東山　私が昭和57年に旧鶴岡西高に転任した時、三省堂の教科書の巻頭が「I was born」でした。それから15年間はこの詩から始まる教員生活をしてきました。吉野さんの詩から庄内的な風土性が伝わってくるのは、言葉の響きの中に暮らしの実感みたいなものが底流れしているからでしょうね。庄内の生んだ詩人であると同時に、庄内を超えた普遍的な詩精神がある詩人だなと思います。

東山 昭子さん
郷土文学研究家。1989年、『庄内の風土・人と文学』で第32回高山樗牛賞を受賞。高校や大学の講義で吉野さんの詩を若い世代に伝えている。

阿蘇　この前、高校生に向けた朗読会で「夕焼け」「奈々子に」「生命(いのち)は」を読んだ時、言葉が彼らにしみていくのが分かったんです。世代を超えて、時代に呼応してるんだって。吉野さんの言葉って生きてるなぁって。

東山　一つとして難しい言葉がないんですよね。やさしい言葉で、力強いメッセージを発する。

万里小路　詩人というのはひとりよがりなところがありますが、吉野さんは詩を書いたら、発表する前にご家族に読んでもらうんです。でもご家族は専門的なことは分からないわけで、「よくわからなかった」と言われたら、分かるようにしようと書き直すのです。一つの作品をとことん書き直す。

阿蘇さんが仰った「言葉がしみていく」というのは、推敲(すいこう)に推敲を重ねて練られた言葉だからですね。難解な言葉遣いはないけれども、言っていることは深いのが特徴です。

東山　それは庄内の文学作品の特性の一つかもしれません。致道館で書かれた漢詩文も、平易で技巧がないなんて言われ方もするんです。でも、書かれたものをどう読むかは読む人の人生。そのことを知るのが庄内の文学の特質だといえるかもしれません。

阿蘇　東山先生の言葉を受けると、「夕焼け」という詩は説明的だという人もいるんです。「やさしい心の持主は」の一連。でもこの一連があるから詩を知らない人にもすっと入ってくるんですよね。これは説明じゃなく吉野さんの橋渡しだと思う。詩人が、詩を書かない者に近寄ってくれている言葉だと思うんです。

やさしい心の持主は
いつでもどこでも
われにもあらず受難者となる。
何故って
やさしい心の持主は
他人のつらさを自分のつらさのように
感じるから。
「夕焼け」

万里小路　吉野さんの詩には教訓的な内容も多く、それは根底に人生哲学を持ってるからでしょうね。哲学者のハイデガーは、世界内存在としての現存在（人間存在）のあり方の根本は「思いやり」だと考えました。「夕焼け」では見知らぬ娘に対して心を寄せています。「思いやり」は共存在という人間のあり方を浮き彫りにします。「生命は」では、花は虫や風が媒介(ばいかい)することで生命体を維持できる。自分は他者があるから存在しているという認識を人間にも照射したわけです。そうした哲理が詩篇の多くに見られます。分かりやすいけれども内容は深い。深いので何度も読み返す。読み返すたびに感じ方が異なります。

生命は
自分自身だけでは完結できないように
つくられているらしい
「生命は」

東山　長い人生のその暮らしの時々に、ぴたっとくる詩がありますよね。

万里小路　ですから、いつまでも愛される詩なんですよね。年齢を重ねるごとに違った感興を得る。そういう詩はあまりありません。

吉野さんの詩は「発見」の詩でもあります。認識の詩人といってもいいんだけれども。「I was born」も自分は「生まされた」と発見する。じゃあ人間の存在って？　という考察に向くんだけど、詩の中でその根本的な解答は出していませんね。

阿蘇 孝子さん
酒田詩の朗読会主宰。1988年に初めて吉野さんを迎えて朗読会を開催。朗読会の企画演出や高校生の朗読指導など活動は多岐。

万里小路 譲さん
山形県詩人会副会長。一枚誌『表象』主宰。評論『吉野弘 その転回視座の詩学』は、吉野弘についての希少な研究書。詩集、評論多数。

男女の組み合わせは、復讐のために仕組まれたとする嵯峨信之さんの詩に誘発され、「餞(はなむ)け」だと吉野さんの視座が転回する。

妻に

生まれることも
死ぬことも
人間への何かの遠い復讐かも知れない
と嵯峨さんはしたためた

確かに
それゆえ、男と女は
その復讐が永続するための
一組みの罠というほかない

私は、しかし

妻に重さがあると知って驚いた若い日の
甘美な困惑の中を今もさ迷う

多分、と私は思う
遠い復讐とは別の起源をもつ
遠い餞けがあったのだと、そして

女の身体に託され、男の心に重さを加える
不可思議な慈しみのようなものを
眠っている妻の傍でもて余したりする

——やっぱり I was born なんだね——父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

——I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね——

「I was born」

阿蘇　最近この詩を読んでいて思ったのが、この父親は息子からこの突拍子もない問いを突きつけられて、怒りや苛立ちみたいな感情は起こらなかったのかなって。

万里小路　「I was born」には、父性と母性がくっきりと表れていますよ。「I was born」や「父」という詩では「なぜ生まれねばならなかったか」という問いに父は答えられない。答えないかわりに母の死や蜉蝣（かげろう）の一生を語る。まるで父性の苦悩を、母性が包みこむかのようにね。

1988年、阿蘇孝子さんが企画演出した遊佐町の米倉庫での吉野さんの朗読会。舞台に木を運び込み森を作った。「この宝物のような日を再び」と吉野さんの没後2014年10月から、吉野さんの詩をよむ「宝の日」を開催。

阿蘇　ご自身のお母さんの存在も投影されているのかもしれませんね。吉野さんはこの詩を、お母さんへの「手向けのような気持ちで書いた」と話してるんですよね。

東山　私が教科書の「I was born」で教えていた時は、思春期から青年期に移る時の励ましの詩だと思っていてね。親も環境も何も選べず生まれてくる。それを自分の内に受け入れて人生をひらいていくんだよと。でも励ましだなんて吉野さんは言いません。見守ってる。そういう詩人のまなざしを感ずるというかね。自分であがいて道を見つけてゆくんだと、教えるんじゃなく気づかせる。その延長線上で父性の感性を感じるのが「創」という詩です。切った枝から新しい根が生える挿し木に着想を得て、傷を原動力にして新しいものが生まれる、始まるんだと。傷つくことを恐れてはダメだと励ますというかね。口ごもっていた親父が口を開いたらこう言うだろうと思って読んでます（笑）。

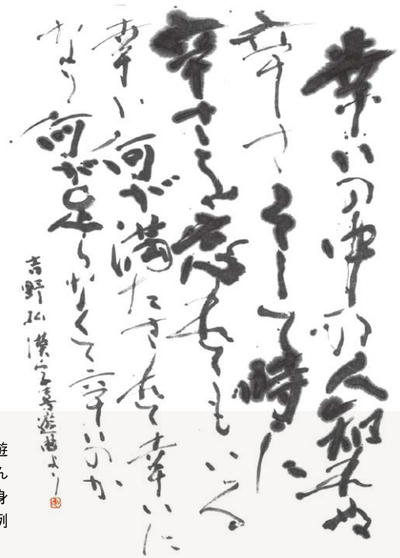
創

創造・創作・創業などの「創」は「つくる」「はじめる」という意味だが元来の意味は「刃物によって受けた創（きず）」のこと。

「漢字喜遊曲 二〇」

東山　吉野さんが漢字で遊ぶ「漢字喜遊曲」のね、「幸」と「辛」の横一画を決めるのはあなた自身で、幸いと思うか辛いと思うかは人それぞれ。ある意味、羽黒山伏の「うけたもう」に通ずる言葉なんですよね。

阿蘇　そんなふうに吉野さんの詩にはどことなく庄内の風土性を感じます。ご本人が「風のことを書かせたら僕の右に出る者はいないよ（笑）」とも仰っていたように、庄内の「風」と「雪」は吉野さんの体感と皮膚感覚にあって、「スキンシップ」なんてまさにそう。「竹箒（たけぼうき）のような吹雪」はあの吹雪を知っている私たちからしたら「ふぶき」なんて軽いものじゃない、「フブギ」ですよ（笑）。吉野さんと同じ皮膚感覚を持っていることは、朗読する上ですごく力になってくれています。



漢字の読みや意味を用いた言葉遊びのような「漢字喜遊曲」。吉野さんの漢字への心酔ぶりは病的と自身が診断、後年は「漢字喜遊病・症例報告」の題がついている。
渡部美恵子・書

特集
詩人・吉野弘さんからの手紙

ふるさとの頬をこする竹箒のような吹雪

「スキンシップ」

阿蘇　私は酒田に住んでいた時に出した第一詩集『消息』にその後の詩人のすべてが凝縮されている気がします。原点のような。

万里小路　『消息』で語られるのは、自分は生まされ、商品労働者として働かされているという認識です。しかし、「奈々子に」で自分を愛することの大事を詠い、後の畢生（ひっせい）の傑作詩集『北入曽』の中の詩篇「生命は」で自分は他者によって生かされているという認識に高めていく。『消息』を原点にしてニヒリストからヒューマニストへと変わっていくところに、吉野詩の本質があります。

東山　吉野さんの詩を読んでると、やっぱり人間って愛しいと思うものね。言葉の力で、人間が持つ慈しみ、悲しみへの共感、そして人を信ずる心を取り戻してほしいと思うから、吉野さんの詩を今読んでもらいたい。

阿蘇　吉野さんの詩には「生きるとは」「死とは」「人間とは」というのが通底していると感じますよね。万里小路さんが前に「人は死んだら、共感する他者の心に行く」と話されていたのがすごく印象的で。

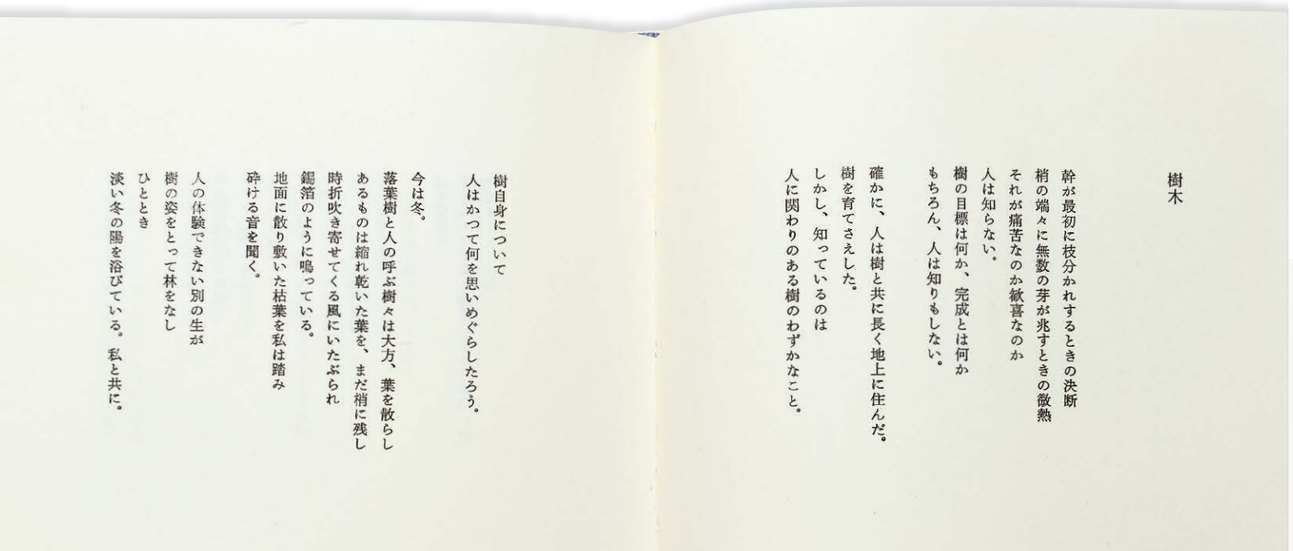
万里小路　人間という存在は、肉体は燃やされても心は燃えないわけです。吉野さんの心は詩集に収められて、読む者が摂取し共感することで詩人は生きる。だから人は死んだら、共鳴する他者の心の中に行くんだと考えます。人が生きた履歴というのは消えることはない。これは単純にして偉大な真理です。形が残らなくても想いや記憶が継承されれば、その人が生きてるってことなんだと思います。

阿蘇　人の心に寄り添い、支え、やさしくさすってくれる。吉野さんの詩の言葉には、そういう力があると思います。詩と共に吉野さんはこれからも私たちの心の中に生き続ける、そんなすばらしい詩人と故郷を共にしていることを誇りに思います。

「僕らみたいに、冬に、ああいうふうに痛めつけられてきた者は、春になった時の喜びを知っていますよね。あの冬をもらって、春をもらうという、あの状態というのは、単なる季節の変化というだけではないと思うんです。それは、人間の精神が形成される時の順序なのだと思います」

吉野弘談（1991年5月9日北入曽にて）
おしゃべり亦太『風の記憶』（SPOONの本）より

人間よりも遥かに長い歴史を生きてきた「樹」は吉野さんが賛美し、心を寄せ、多くの詩に書いたモチーフの一つ。



樹木

幹が最初に枝分かれするときの決断
梢の端々に無数の芽が兆すときの微熱
それが痛苦なのか歓喜なのか
人は知らない。
樹の目標は何か、完成とは何か
もちろん、人は知りもしない。

確かに、人は樹と共に長く地上に住んだ。
樹を育てさえした。
しかし、知っているのは
人に関わりのある樹のわずかなこと。

樹自身について
人はかつて何を思いめぐらしたろう。

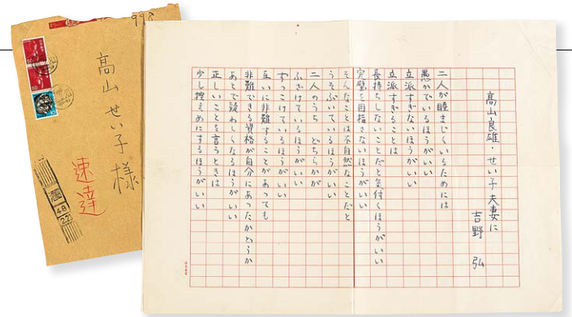
今は冬。
落葉樹と人の呼ぶ樹々は大方、葉を散らし
あるものは縮れ乾いた葉を、まだ梢に残し
時折吹き寄せてくる風にいたぶられ
錫箔のように鳴っている。
地面に散り敷いた枯葉を私は踏み
砕ける音を聞く。

人の体験できない別の生が
樹の姿をとって林をなし
ひととき
淡い冬の陽を浴びている。私と共に。

特集 詩人・吉野弘さんからの手紙

吉野さんへの手紙

詩の言葉を心にしまって時々取り出し、励まされたり省みたり。吉野さんから受け取った詩という手紙を自分の中に携え、また誰かへと読み継いでいる皆さんがいます。手紙を受け取った私たちから、親愛なる吉野さんへ。



吉野さんの実姉・静さんの次女、せい子さんが結婚する際に贈られた詩が、後の「祝婚歌」。結婚式の1日前に速達で届いたという封筒と詩。

祝婚歌、前夜

——元幼稚園教諭　加藤 真知子

「来た？」「来ねー」。数日後、「まだ？」「まだー」。結婚式まで1週間を切った日、高山せい子さんから「来たァ！」との電話。よほど急いだのだろう、封は指で波型に開けられ、結婚祝いの詩であることを確認するや、私の元に届けてくれた。「真知子さん、頼む」と。

当時、私たちは酒田混声合唱団の一員として活動していた。「詩人である叔父からの祝いの詩を、披露宴で真知子さんに朗読してほしい」。

結婚式の目前に、その詩は届いた。さあ、練習だ！

1行目で目が留まる。「二人が睦まじくいるためには／愚かでいるほうがいい」声も止まる。しばし沈黙。とにかく目で読もうと思い直した。詩の後段では涙目になったことを思い出す。

披露宴での詩の初披露が迫る。自分に言い聞かせた。「ゆったり　ゆったかに　光を浴びているように、そんな感じで朗読しよう」。

あの時から50年が過ぎた。「祝婚歌」と名付けられたこの詩は、今では全国の人に愛される詩となった。私自身も家事、育児、仕事、友人などさまざまな人との付き合いの中で、何度立ち止まり、この詩を復唱し、進む道を確認したことか。

今、機会をみては「祝婚歌」と共に、吉野弘という酒田生まれの詩人の紹介を行っている。「この詩が、詠み人知らずの民謡のように、多くの人に愛され口ずさまれるように」との吉野さんの願いを受け止めながら、ささやかでも末長く、詩の手渡し役を担っていきたいと思っている。

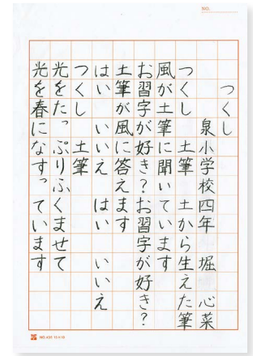
現代書と詩

——書家　渡部 美恵子

「現代書」の書作家として、吉野弘さんの詩には当然のように心をひかれた。最初に作品にしたのは「歩く」だった。「膝小僧を今日の風になぶらせて歩く」に、小さき息子を思いながら。それからいくつ制作しただろう。自然を、生命を、思想を、その生き様を、心を揺さぶられながらいかに表現するか——。

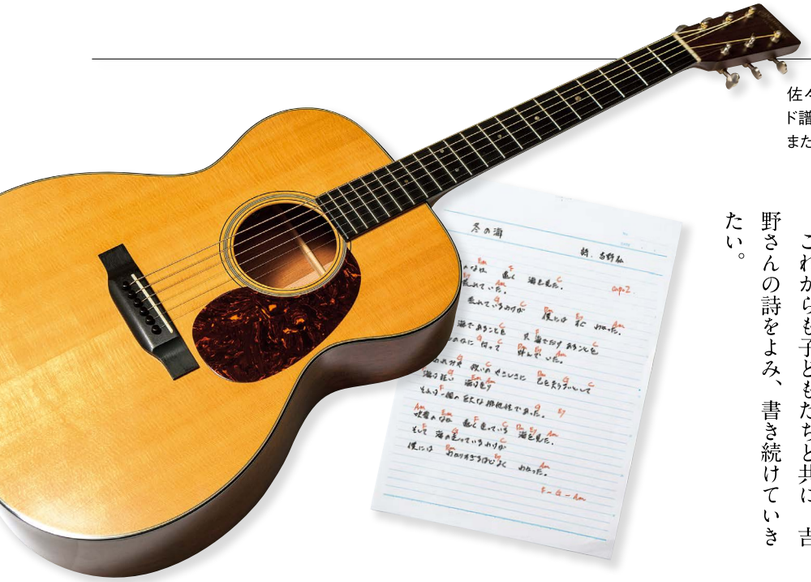
5年ほど前、酒田市の中学校向けに小冊子が作られた。書道をしている子どもたちに読んでもらい、その中から字句を選んで、詩の一部を色紙に書いて展示して、会場で朗読も試みた。ある時は、土門拳記念館で朗読とギターに合わせて、私は30分ほど書きまくった。その時間はじつに爽快だった。

これからも子どもたちと共に、吉野さんの詩をよみ、書き続けていきたい。



中学二年　漢字喜遊曲　高橋 美慧

渡部さんから指導を受けている生徒さんの書



佐々木さんのギターと「冬の海」のコード譜。吉野さんの詩が音になることで、また新たな言葉の世界が広がる。

「冬の海」のこと

——ギター奏者　佐々木 正

「フォークシンガー高田渡の『夕焼け』を歌ってほしい」。請われて参加した朗読会で、このやさしくもせつなく心にしみる大好きな歌の詩が、酒田市出身の詩人、吉野弘さんの作品だったことを知りました。その後、常連となった朗読会で最初に曲をつけさせてもらったのが「冬の海」です。自宅のすぐ目の前が日本海ということもあり、冬の七転八倒して荒れ狂う海や、叩かれるような暴風は痛いほどよくわかる。「冬の海」には、自分が日々目の当たりにしている風景や心象までもが表現されている。メロディーが湧き上がってきました。吉野さんが言葉で描こうとした世界と自分の曲が解け合えた気がしてうれしかった。詩の言葉を大切にしながら、その世界に寄り添うような曲でありたい。演奏するたび、いつも強くそう思っています。

夕焼け文庫

——学校司書　榊原 有友子

旧酒田商業高校に勤務していた時、卒業生である吉野弘という詩人を初めて知りました。そして「夕焼け」の詩に出会いました。

胸の奥が何とも苦しくなりました。「他人のつらさを自分のつらさのように感じる」やさしい心を持った娘は美しい夕焼けも見ず、下唇を噛んでうつむいたまま、無事家に着いたのだろうか。きっとその晩、歯がゆさを抱えながら眠りについたのではないだろうか。いつか自分に子どもができたら、こんなやさしさを持った人になってほしい、とぼんやり思ったものです。

それから阿蘇孝子さんと出会い、高校生たちと吉野さんの詩を朗読する機会をいただきました。吉野さんの紡いだ言葉を声に乗せて空気に返すことで、一層味わい深いものになることを教わりました。自分と他者を想う心、自然を敬う心……吉野さんの詩には一貫して命の温かさを感じます。これからも人生の折々で吉野さんの詩を身近に感じ、それはきっとまた新しい風となってくれるような気がします。

酒田光陵高等学校の図書館内「夕焼け文庫」。榊原さんが同校の司書時代に多くの人の協力を得て設置した。

半透明・乳白色の紐の中心を
鮮烈な赤い血管が走っていた
お前が、ぐんと身体をそらし
ふとい紐はブルンと揺れた

『創世記――次女・万奈に』

1

3

2

ひとが
ひとでなくなるのは
自分を愛することをやめるときだ。
自分を愛することをやめるとき
ひとは
他人を愛することをやめ
世界を見失ってしまう。
自分があるとき
他人があり
世界がある。

『奈々子に』

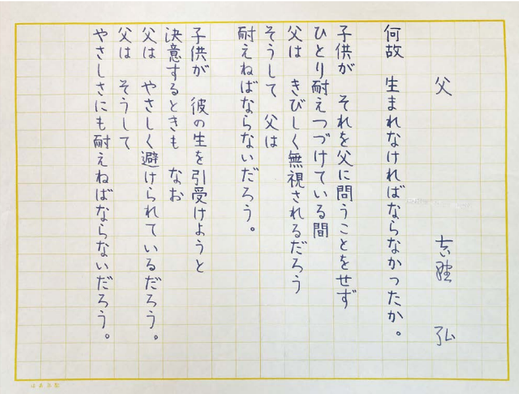
4

1. 1958年、奈々子さんが撮影した吉野さんご夫婦。奥様の喜美子さんと吉野さんは酒田の今町（現北今町）育ち。子どもの頃からの顔なじみで、同じ会社で同じ課に所属。結婚式は料亭「相馬屋」で。**2、3.** 東京都板橋区の向原団地に住んでいた頃。**4.** 2023年初冬、吉野さんが晩年を過ごした静岡県富士市のご自宅で、左から奥様の喜美子さん、長女の奈々子さん、次女の万奈さん。奈々子さんはお父様の没後、朗読や講演などを行っている。

特集
詩人・吉野弘さんからの手紙

夫、父、詩人 吉野弘

吉野さんの詩に込められた、新しい生命への祝福と歓喜は家族の存在という〝出会い〟から生まれたものかもしれません。2023年11月、吉野さんが晩年を過ごした静岡県富士市のお宅に奥様の喜美子さん、長女の奈々子さん、次女の万奈さんを訪ねました。



父

何故　生まれなければならなかったか。
子供が　それを父に問うことをせず
ひとり耐えつづけている間
父は　きびしく無視されるだろう
そうして　父は
耐えねばならないだろう。
子供が　彼の生を引受けようと
決意するときも　なお
父は　やさしく避けられているだろう。
父は　そうして
やさしさにも耐えねばならないだろう。

吉野弘

奈々子さんが生まれ、父親になってから書かれた中の1篇。吉野さんが考える父性を思わせる。

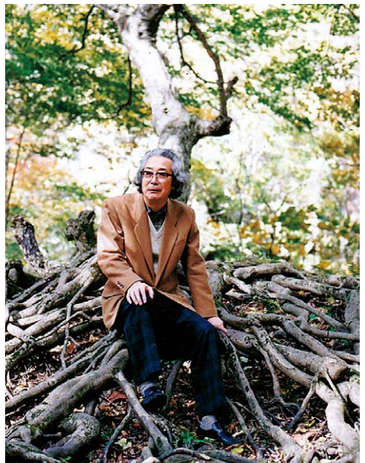
「父が会社を辞めて詩人としてやっていくことを決めた時、母は止めることなく後押ししたそうです。母がいたから、父は詩人吉野弘でいられたのだと思います」。そう話すのは、長女の奈々子さん。奥様の喜美子さんは傍らで聞きながら「お父さんは勇気があったよね。私は全然不安もなかった。のほほんと生きてたからね（笑）」と少し照れて話します。

吉野さんにとってご家族は、常に最初の読者でした。「詩ができると『どうだ？』と言って原稿用紙を持ってきて。私たちが読んで『よくわからない』と言うと書斎に戻って、また見せにくる。『おもしろいね』って言った時は、うれしそうに冷蔵庫からビールを出すんです」。

〝文章は人に伝えるもの。わかりやすい言葉で読む人に届けたい〟吉野さんがそう話すのを、奈々子さんは子どもの頃からよく聞いて教わったそう。「小学生の時からずっと、作文の課題を父に見てもらっていました。すると原稿用紙が赤ペンで真っ赤に添削されて返ってくるんです。悔しいけれど、もちろん的確で。どんなに仕事で忙しくても作文を見てくれて、私たち娘がやることをいつも応援してくれました」。

現在、銅版画家として活動する次女の万奈さんもこう振り返ります。「絵を描いたり何かを作ったりするとすごく褒めてくれるんです。家じゅうに私の絵を飾って、展覧会を開いてご近所さんに見せたことも何度かありました。父は詩の題材が見つかると、自分のものになるまでとことん調べて勉強する人でしたね。詩を書くことを仕事にしている父のことを自慢に思っていました」。

酒田、東京、埼玉、静岡で暮らし、その折々で吉野さんの詩は生まれました。代表詩「奈々子に」は酒田に住んでいた頃、1歳半頃の奈々子さんの寝顔を見て書かれた詩です。奈々子さんはこの詩から、お父さんの想いをこう受け止めます。「私は詩の後段の『自分を愛する心』の意味をずっと考えて生きてきました。その答えが分かり始めた気もしますが、きっとこの詩はずっと私に問い続けるんです。そんな一生の課題を与えてくれた父に感謝しています」。



1991年、青森県奥入瀬への旅で万奈さん撮影。

小松屋又三郎の箸枕

令和元年に
180余年ののれんを下ろした
酒田の老舗菓子舗の
「雛の飾り菓子」が
普段使いの箸枕に

箸枕とは箸置きの別称。箸を枕に置いて休ませるとは、何と風情のある響きだろう。しかもこの枕は単なる枕ではない。かつて3年越しの予約待ちといわれた「小松屋の雛の飾り菓子」の木型で作る、緻密で美しい枕である。

小松屋の木型は、酒田に招かれた京都の菓子木型職人が、江戸末期から明治にかけて手がけたものだ。菓子の両面に意匠が施されるという珍しい3枚1組の木型で、菓子見本帖などと一緒に40枚近くの木型と技が小松屋に継承されてきた。この木型から生み出される飾り菓子は地域を越えて人々に愛でられ、2015年にはミラノ国際博覧会に出展。2019年に同店が1 80年ほどの歴史に幕を下ろしてからは、復刻の要望が後を絶たなかったという。

2022年、9代目の小松尚（たかし）さんが初代小松屋又三郎の屋号を引き継ぎ、飾り菓子の製作を再開。一般公開が始まった旧廻船問屋「家坂亭（いえさかてい）」を拠点に木型の保存と飾り菓子文化の継承に乗り出した。箸枕を開発したのも同じ頃。飾り菓子を季節を問わず普段使いができるモノにすることで、木型の素晴らしさをより多くの人に伝えたいという。鶴や亀の縁起物から若鮎や稲穂などの季節物まで、食卓にそっと置かれる可憐な箸枕は、会話と笑顔を運んでくれるだろう。

ちなみに先日、小松さんは家坂亭隣に和菓子工房を開店し、「呉竹羊羹（くれたけようかん）」と「呉竹最中（もなか）」の製造販売を開始した。青のりの香り豊かなあの味の復活を、どれだけの人が待ち望んでいたことか。時を越えて愛され続けた菓子の力は、大きい。

箸枕は「酒田夢の倶楽」で通年販売の他、「旧廻船問屋 家坂亭」の開館時（3〜11月）に取り扱い。2023年12月15日にオープンした手作り菓子工房「小松屋又三郎」では、雛の飾り菓子、呉竹羊羹、呉竹最中、季節の和菓子を手作りで製造販売する。

小松屋又三郎　090-6222-9007
komatsu_4187@yahoo.co.jp

（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行

朝日浴び白鳥羽ばたく 大山上池・下池を歩く

立冬を迎える頃になると、庄内では時雨れる日が多くなる。雪起こしともいわれる雷と虎落笛（もがりぶえ）が聞こえるようになるといよいよ冬がやってくる。

季語 白鳥（はくちょう／はくてう）
カモ科でオオハクチョウ、コハクチョウなどの水鳥の総称。冬、北から日本に来て越冬する。

朝日を浴び飛び立つ白鳥

朝晩、家の上を飛んでゆく白鳥の声に空を見上げる。日中は庄内平野のあちこちで落穂を拾う姿を目にする。晴れた朝、渡り鳥を見に大山上池・下池※に向かった。大山上池・下池は鶴岡市西部に位置する高館山（273m）の麓にある大小二つの淡水の農業用ため池で、夏には蓮の花が咲き、地域の生活の一部としてその歴史は古い。毎年鳥海山に初冠雪が見られる頃から、白鳥などの渡り鳥が2万羽以上飛来する。

白鳥の白からず田を啄める

―加藤爽

うっすらと明るくなる日の出前、池は少しずつ慌ただしくなる。朝日が昇ると朝露が光の粒となり、辺りは煌めきの世界となる。1羽の白鳥が首を縦に振り、合図を出して走り出すと、周りの仲間たちが一斉に飛び立つ。水面を蹴る音が静寂を破り、水しぶきと大きな羽音が響く。池上を旋回しながらみるみる高度を上げていった。水面に優雅に浮かんでいる時の佇まいとは真逆の、飛翔の瞬間の力強さに圧倒される。

白鳥の帰る声聞き目覚めけり

―阿部月山子

高館山の紅葉が青空に映え、上池も朝日に照り輝いていた。真上を飛ぶ白鳥の羽を広げたその姿は、こんなにも大きく逞しいものなのかと驚く。蒼穹（そうきゅう）が白鳥の白さを強調する。

多数の鴨たちが田んぼから戻り、白鳥たちと入れ替わる。破（や）れ蓮の残る水面に降り着くと、賑やかな声が辺りに響く。顔を水に入れたかと思うと、尾を水中に沈め、羽根を広げて気持ちよさそうに水浴びしている。中には喧嘩しているのか、じゃれているのか、そんな2羽もいる。

下池の水鳥と紅葉

雁のこえ水のこえ即仏のこえ

―畠山弘

大山上池・下池に飛来する白鳥は、1980年代以降に越冬するようになったといわれている。田んぼに雪が積もってしまい餌がとれなくなると、さらに南下するという。下池の自然学習交流館「ほとりあ」では、渡り鳥の種類や飛来数を定期的に紹介している。よく見ると、白鳥に交じって大きな白鷺も飛び立っていった。ここは野鳥たちの楽園にもなっている。

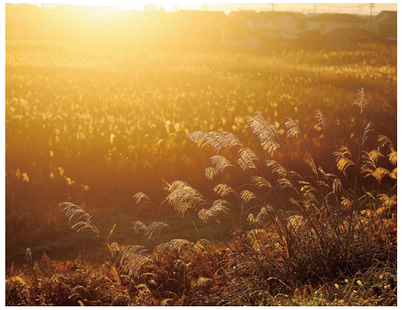
白鳥の翼は熱く水を撃つ

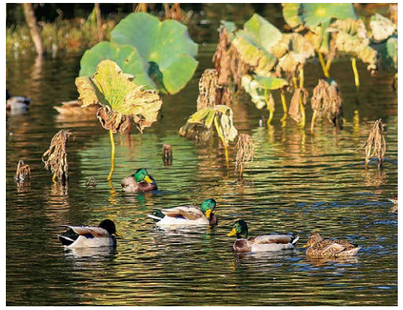
―あべ小萩

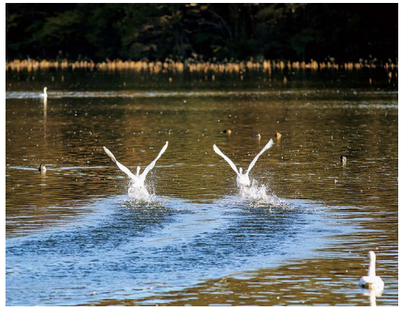
庄内は晩秋から冬にかけて日照時間がぐっと減る。気持ちも少し曇ってしまいがちだが、貴重な晴れの日に水辺の水鳥たちを眺めているだけで、エネルギーが満たされていく。これから来る冬を前に心を青空に羽ばたかせた。

※ラムサール条約登録湿地（2008年）

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）


都沢湿地と朝日


上池の破れ蓮と鴨


白鳥の飛び立ち